

ご遺体に学ぶ医療・医学研究を支えるもの

—解剖・死後の身体提供を表明した人々52名の証言の検討—

1. 背景

近年、死後脳研究は神経疾患や精神疾患の解明に重要な役割を果たしています。こうした研究活動には、研究参加に協力する人の存在が欠かせません。一方、日本では、解剖写真の SNS 投稿が大きな話題になったように、身体取り扱いや流通のあり方について、多くの人々が関心を持っています。研究に参加する意思を表明した市民・患者の視点に寄り添い、その背景や関心をより深く知る作業が研究側にも求められると考え、調査を始めました。

2. 研究手法・成果

東京都健康長寿医療センター（東京都板橋区）のブレインバンク（死後脳のバンク）への提供意思を登録した 88 名を対象に郵送調査を実施し、52 名から回答を得ました（回答率 59.1%）。今回は調査の一報です。

主な成果：

死後の身体提供の意向を表明した個人の思い・懸念に迫ったアプローチ自体が極めて貴重なものです。具体的な内容としては以下のものが挙げられます。

a) 貢献・協力姿勢を支える要素

- 協力の意向の背景として「医学・研究に貢献したい」という思いが一番多く挙げられました。
- ただ、これが単一の背景というよりは、「受けた医療への感謝」「家族・周囲の影響」など、実際には複数の思いや動機が連なり、重なって表明に至っていることが多いようです。登録者の年齢・立場による違いもあるようです。

b) 一層の情報提供が期待される内容

- 意思表示をした後も、研究の進展について継続的に関心を持ち続けていることがわかりました。
- 死後にどのような流れで提供がなされるか、家族への情報の充実を求める視点も示されました。

3. 波及効果、今後の予定

ご本人の関心や懸念に応じたコミュニケーションの重要性、家族向けガイダンスの充実や、研究成果の定期的な発信の重要性が明確になりました。今回はヒアリングの一報であり、今後もインタビュー調査などを通じてより検討を深める取り組みを続ける予定です。

4. 研究プロジェクトについて

資金提供：日本医療研究開発機構（AMED） 課題番号：JP21wm0425019, 24wm0625012h0001

本研究成果は、2025 年 2 月 7 日に国際学術誌「*Neuropathology*」にオンライン掲載されました。

<用語解説>

1. ブレインバンク（脳バンク）：神経疾患や精神疾患の研究のために、提供された脳組織を保存・管理する施設。日本では「日本ブレインバンクネット（JBBN）」が各施設の連携を支援しています。
2. ブレインバンク提供登録：死後の脳提供について、本人が生前に意思を表明し登録する制度。家族の意思決定の支援となることが期待されています。

<研究者のコメント>

「本研究の発表にあたり、遺体研究やブレインバンクは、医療・研究と社会との間にあり、一つ一つの出会いを大事にして積み上げられてきたものであることを改めて実感しております。

解剖や死後の研究参加の話は、年末の報道では大きな話題になりましたが、従来、社会的に注目を集めることは多くありません。世代をまたいで、患者・家族と医療者・研究者との共同作業で活動が積み重ねられていることや、今後も続けていくためにどのような取り組みが必要かを、引き続き考えていきます。

これまで、研究倫理の文脈でも、『遺体』や『死後』の話はほとんど議論されてきませんでした。その人が生きていることを前提とした配慮・保護の議論の延長のみで、医学研究をカバーし切れるのか、わたしは問題意識を持ってきました。死後の研究参加は人や他者を信頼し、そこに託す視点が強くなります。この視点は、ブレインバンクに限らず、現在・将来の研究活動にとって大きな広がりがある概念だと考えています。」
(井上悠輔)

<論文タイトルと著者>

タイトル：Bridging minds: Participant perspectives on postmortem brain research and engagement

(心をつなぐ：死後脳研究における参加者の視点、研究と市民をつなぐ活動のあり方)

著者：井上悠輔^{1,2}、小幡真紀³、森島真帆³、村山繁雄³、齋藤祐子³

所属：¹東京大学医科学研究所公共政策研究分野

²京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻医療倫理学分野

³東京都健康長寿医療センター研究所高齢者ブレインバンク（神経病理）

掲載誌：*Neuropathology* DOI：10.1111/neup.13030